2010年3月1日発行（年4回3、6、9、12月1日発行）第13巻第1号／通巻第43号　2001年11月21日第3種郵便物認可

北國文華

2010
春
第43号

特集Ⅰ　ボンジュール・カナザワ　日仏交流の16日間

特集Ⅱ　能登が生んだスーパー絵師　長谷川等伯没後400年

新連載　竹山 洋　小説「おんな物語」

北國文華

第43号　目次

磯村尚徳さん

地下朱美さん

特集Ⅰ

ボンジュール・カナザワ
日仏交流の16日間　カラーグラビア　1

文化都市は
不況にびくともしない
外交評論家、パリ石川県人会名誉会長　磯村　尚徳　17

年間800万人　ルーブル躍進の秘密
金沢21世紀美術館長　秋元　雄史　27

鮮烈なる
ショパンのふるさと愛
ラ・フォル・ジュルネ金沢 クラシック・アンバサダー　フランソワーズ・モレシャン　35

文学が生まれるまち
金沢、ディジョン
東京女子大教授　佐々木涼子　41

特集Ⅱ

長谷川等伯 没後400年
能登が生んだスーパー絵師　カラーグラビア　87

能登の松林に強靭（きょうじん）な生を見た
―小説「松林図屏風」を書いて
作家　萩（はぎ）　耿介（こうすけ）　103

日本の美を追究した到達点
―「松林図屏風」を読み解く
石川県立美術館 学芸専門員　村瀬　博春　109

特集Ⅰ ボンジュール カナザワ

Bonjour Kanazawa

文学が生まれるまち 金沢、ディジョン

東京女子大教授 佐々木涼子

「文学と土地」というテーマはなかなか魅力的で、それに類する論評も多いようだが、私自身はこの問題をあまり突き詰めて考えたことがない。文学と土地とのかかわりといっても、文学に描かれる土地なのか、文学を生む風土なのか、あるいは文学という商品が生産され、取り沙汰される場所なのか、問題をとらえる角度によって、話はまったく違ってくるはずだ。

ただ個人的には一定の土地に対する思い入れはあるし、また曲がりなりにもフランス文学にかかわって暮らしてきた。そうした雑多な経験の中から、北陸という風土、フランスという土地、そしてフランス文学を結ぶ糸を撚り出し、たぐってみることにしたい。

私にとっての石川県

忘れることのできない経験は、プルーストの

『失われた時を求めて』を初めて読んだ時である。第1巻『スワン家のほうへ』の舞台になっているコンブレーという町を、これはまさしく私にとっての石川県だ、と思ったのだ。

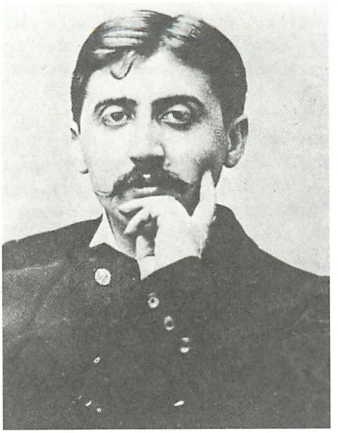
この長編小説は、少年時代の「私」が休暇に訪れた父方の実家での日々を思い出すところから始まるのだが、私も子どもの頃、夏休みになると、きまって母の里である金沢と父の郷里である七尾に行った。自分の家でもあり旅先でもあるという、日常と非日常が抱き合わせになった土地の感覚は、まさに私自身の実感だった。

『失われた時を求めて』はほとんどの読者が最初の数十頁で挫折すると言われている少々まだるっこしい文学だが、私がその難所を苦もなく乗り越えることができたのは、それが私自身の物語のように感じられたからだと思う。結局、私はその後の数十年を、プルーストを看板に掲げて過ごすことになっただけでなく、いまでもやはり、そのコンブレーにまつわる部分が私のプルースト体験の核心になっているから、その意味では、私は金沢と七尾という土地に計り知れない大きな恩恵を蒙っていると言えそうだ。

何の変哲もない小さな町

コンブレーは小説上の町の名前で、そのモデルになったイリエという町をフランスに留学した折

著者が留学したころに撮影したイリエの町



マルセル・プルースト（1871〜1922）　フランスの作家でエッセイスト、批評家としても知られる。小説を書くに至るまでの歩みをつづった自伝的大作『失われた時を求めて』は20世紀の長編文学として最も重要な作品の一つといわれる。

（写真提供・共同通信社）

りに訪れたが、何の変哲もない小さな田舎町でしかなかった。大聖堂で有名なシャルトルから鉄道の支線で少し行ったところにあり、小説の中であんなに慕わしげに描かれた教会にしても、幾つもの壮麗な聖堂を見てしまった後では、お世辞にも感嘆できる建築ではなかった。もちろん見てよかったけれど、見なくてもよかった。それが正直な思いだった。

しかし、イリエ（コンブレー）がつまらない町だったからといって、プルースト文学に対する私の愛着が少しでも減ったわけではない。それどころか、ますますプルーストに感心してしまったのだから、文学とそのモデルになった土地との関係というのは、まったくもって一筋縄ではいかないのである。これは人伝てに聞いたことだけれども、ある有名なフランス文学者は『スワン家のほうへ』に出てくるサンザシの垣根のモデルを見て、こんなありきたりな景色から、あの素晴らしい文章を生み出したのかと思ったら、感激のあまり頭が痛くなったそうである。まったく、それが言葉の魔

術たる文学なのだ。

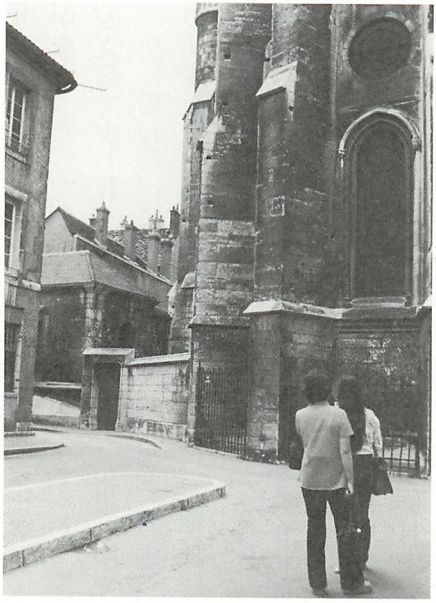
ちなみにイリエはプルーストの小説に描かれて世界的に名を上げたので、今では町の名前をイリエ＝コンブレーと改めている。名前には文学的な要素が付け加わったが、町そのものは金沢や七尾などとは比ぶべくもなく、まことに簡素である。

歴史のまちディジョン

文学性に関してイリエとは真逆の土地経験がディジョンである。私が20代後半に留学して、最初の1年（正確には10カ月）を過ごした都市だ。ワインで有名なブルゴーニュ地方の県庁所在地だが、歴史はまことに古く、新石器時代から人が住み、ローマ時代にはローマとパリを結ぶ街道の要衝だった。ディジョンが一番栄えたのはブルゴーニュ公の領土がフランドル（今のオランダ）まで広がった中世で、ブルゴーニュ的な視点に立つと、16世紀以降にフランス王家となったブルボン家やオルレアン家などは新参者に見えてくる。

名物はワインの他にもマスタードやカシス（黒スグリ）、エスカルゴなど特産物が多く、毎年秋にはフォワール・ガストロノミック（美食市）が開かれて、広大な会場にヨーロッパ全域からおいしい物が集まってくる。自動車のルノーの本社もあったから経済的に豊かなのだろう、目抜き通りの店のウインドーも人々の服装も貧しさを感じさせるものは少なかった。

最近、日本でもよく知られているアペリティフ



中世の家が建つディジョンの街

（食前酒）のキールはディジョン発である。大戦後、20年以上もの長きにわたってディジョン市長を務めたキール氏が、ブルゴーニュの赤ワインは世界的に有名だが、白ワインはその割に売れないため、なんとか白ワインを使ってもらう手はないかと思いついたのが、白ワインにカシスを加えた薄赤い飲み物で、市のレセプションなどで供したのが始まりだ。70年代にはまだパリでも珍しかったが、今ではパリでも東京でも飲み物メニューの定番である。中にはキール・ロワイヤルといって、シャンパンにカシスを混ぜるものもあるが、それではシャンパーニュ地方のシャンパンを使うことになって、ブルゴーニュの白を使ってほしいと願ったキール市長の志が無になる。キールをご注文の際は、ぜひとも正統の白ワインのキールを！

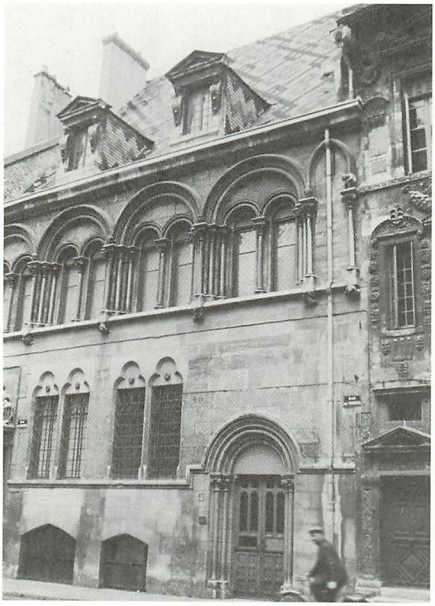
金沢に通じる街の空気

このディジョンが、実に金沢に似ているのである。赤みがかった石の建造物の間に、しっくいの白壁に太い梁（はり）を張った中世の家がいまも健在で立ち交じり、石畳の裏小路の先に黄色いニシキヘビそっくりのブルゴーニュ瓦の屋根が現れたりして、外観は金沢と違うのだけれど、街の空気といい、人々の気質といい、何ともいえず通じるものがあった。

土地の人に、ディジョンをどう思うかと聞かれることも多く、その度に、ここは私が生まれた金沢という都市に似ているのです、と答えたものだ。すると彼らは初めて耳にするカナザワにいたく興味を示して大きな目を見開く。私は彼らに、それは古く江戸時代に揺るぎない文化を築いた歴史的な街で、いまでもその名残をとどめて街並みにも奥ゆかしい風情があり、人々の物腰や言葉遣いからも真の日本文化の味を感じることができる土地柄である、と熱意を込めて語った。それに何より食べ物がおいしい、と。その解説を聞いてディジョンの人は自分の街が誉（ほ）められたように感じたのだろう、至極満足そうな顔をした。

フランスには珍しく湿度の高いディジョンは、

空気にしっとりとした質感があって、人の立ち居振る舞いにもパリのような軽薄さがない。実に深みのあるいい土地柄だったが、長所がそのまま短所になった面もなきにしもあらずだった。まず外の人間に対して警戒心が強く、人見知りする。外国人の留学生は下宿を探すのにひどく苦労していた。パリから1年遊学していた友人は、ディジョンの人間は冷たいと文句タラタラ。「私が早口で何を言ってるかわかんないなんて言うのよ、あの人たち！」。


ブルゴーニュ瓦がディジョンの景観の特徴

しかし慣れるのに時間がかかる半面、いったん知り合うと情の深いところがあって、外国人の私のことまで、いつ見ていたのかと思うほど細かく観察していたことが後になって判明したりする。そして、他人が自分をどう思っているのか、妙に気にするのだ。おもしろいことに、ディジョンに対して一番批判的なのが、他でもないディジョン人だった。「まったくディジョン人ときたら…」と、ため息交じりに言うのである。このあたり金沢人と似ているのかどうか、実際に北陸に長く住んだことのない私にはよくわからない。

濃厚な文学の薫り

このディジョンの街は、私には文学の薫りが濃厚であるように思われた。街々の佇まいや人々の表情だけでなく、降る雪の一ひら、雲間に覗く陽差しの一筋にも文学があったが、それというのも寝食の苦労を免れて留学していた当時の私が、朝

から晩まで文学に浸りきりだったからに違いない。日本人は私を入れて10人ほど。話す相手も少なく、1人でものを考えたり書いたりする時間があれほどふんだんにあった時期は、後にも先にも覚えがない。

いつか小説を書くとしたらディジョンを舞台にしよう、と私は思っていた。（そして実際、活字になった私の唯一の小説はディジョンが舞台なのだけれど、しかしあの濃密な街の空気を巧く描けているかどうか…）

それほど文学的な（語の定義はともかく）雰囲気の都市であるにもかかわらず、ディジョンから有名な文学者が出たという例はないようだ。ディジョン出身の文化人では、フランス・オペラの父ラモー、エッフェル塔を設計したエッフェルあたり。あとは確か百科全書派のルソーが若い日、音楽の記譜法に関する論文を提出したのがディジョンのアカデミーだった。

だが出身地は違っても、ディジョンに深い印象を刻んだ芸術家は多いと思う。例えば懐かしの映画『恋人たち』に登場する穏やかな川は、ディジョンの外れを流れるブルゴーニュ運河だという。そう思って見れば、この映画の中の街にはディジョンと同質の雰囲気が感じられるし、同じルイ・マル監督後期の映画『好奇心』に出てくる人々や街並みもディジョンを思わせる。監督自身は北フ

現代人のための健康リスクマネージメント

35歳から知っておきたい健康基礎知識

藤木龍輔著

生体システムが衰え始めると言われる35歳からの健康危機管理法を解説しています。がんや血管病などの発症過程に迫り、生活習慣の見直しこそが病を防ぐ基本であると説いています。

●定価1500円（税込）

北國新聞社

〒920-8588 金沢市南町2番1号

（出版局）☎076(260)3587

ランスのブルジョワ出身だそうだが、このブルゴーニュの中世の都にひとかたならぬ思い入れがあったというのも想像に難くない。

文学の原動力とは

プルーストは『失われた時を求めて』の中で土地や土地の名が誘う思いについて熱く語っている。そのほとんどが、いまだ訪れたことがなく、それゆえに想像力を刺激してやまぬ遠い土地だ。プルースト自身はパリに生まれパリに死んだ人、しかも病弱で思うように旅もできなかったから、遠い土地への思いには並々ならぬものがあったのだろう。しかし住み慣れたパリについては、特に語るほどのことはなかったようだ。

そこから思うに文学と土地とのかかわりは、日常性に腐食されていない時にこそ、いっそう深まるのではないだろうか。文学は沈潜する思いや天翔(かけ)る夢想に導き出されるもので、目の前の知りすぎたものからは発現しにくい。ちょうど恋と同じように、離れていることが強い磁力を生むのである。適度に離れていること、未知の部分があることが文学の原動力なのだ。プルーストの考えを私流に解釈するとそういうことになる。

あまりに有名なので、ほんとうはここで引用するのは気恥ずかしいのだけれど、犀星の「ふるさとは遠きにありて思ふもの／そして悲しくうたふもの」も、つまりはそういうことだと私は思っている。

佐々木涼子（ささき・りょうこ）
1944（昭和19）年、金沢生まれ。父親は直木賞作家の杉森久英。東大仏文科卒。東京女子大教授。専門はマルセル・プルーストとフランス・バレエの歴史。著書に『ロマネスク誕生―プルーストの文学をめぐる七章―』（芸立出版）、『世界のバレエを見てまわる』（新書館）、『バレエの歴史』（学研）など。